

教育の閉塞感浮き彫り

埼玉大で全国集会

さいたま

全国教育研究交流集会（さいたま教育文化研究所など主催）が7、8日、さいたま市桜区の埼玉大学で開かれた。研究者や教員らの報告から、子どもの貧困や学校内外の閉塞状況に縛られる若者の姿が浮き彫りになった。（保坂直人）



アスポートの活動について報告するスタッフ7日、さいたま市桜区の埼玉大学

りにすると、家庭の支援は難しい」と指摘する。

白鳥勲代表は貧困世帯への対応について、「単純に呼び掛けただけでは絶対に来ない」と繰り返し訪問する重要性を強調。勉強を通して変わっていく子どもたちに接し、

「教室で学ぶことの喜びを感じている。頼れる大人がいることが、生きる希望につながる」と意義を説いた。

シンポジウムでは、高校や大学の教員らが教育現場で起こっている現状や実践を発表した。大東文化大学の中村麻由子氏は、教育を巡る閉塞状況について、子どもや若年層のコミュニケーションの在り方に注目。周囲のまなざしや社会の「モノサシ」を異様なまでに気にする若者の姿勢を挙げ、「問うこと、学ぶこと、表現することが表層化し、コミュニケーションの重層性が失われている」と述べた。

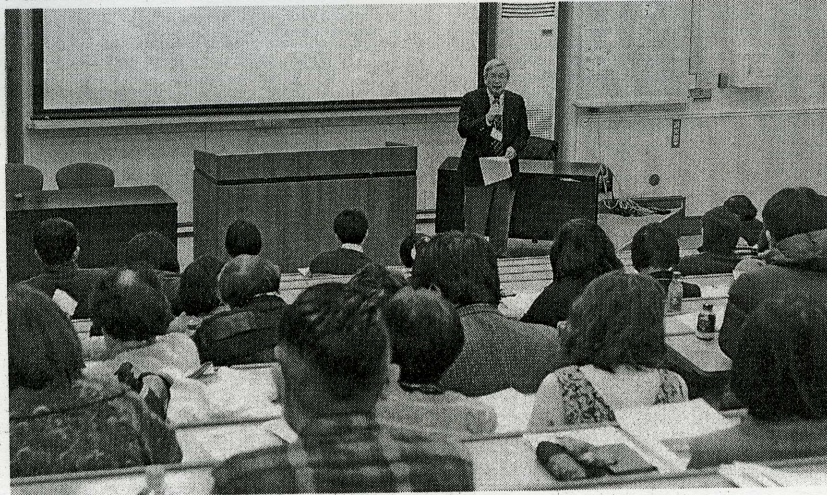
7日の全体会では、県内で貧困家庭の子どもを対象に学習支援に取り組んできたアスポートが報告した。アスポートは、自治体から事業を委託され、県内各地で教室を開催。生活保護世帯などを訪問し、教員退職者や学生ボランティアが、子どもたちに無料で勉強を教えている。

アスポートスタッフの土屋匠宇三さんは、大人に不信任を持つ中学生への対応を紹介した。土屋さんは「人から間違えたと言われると、攻撃さ

れていると感じる」と、勉強に消極的な中学生の思いを代弁。ゲームや遊びなどを通じて会話を増やす中で、問題が解けるように導いた経験を踏まえ、「希望を引き出すことが大切」と振り返った。

同じくスタッフの吉田友紀さんは、親子関係が複雑な家庭を支援する難しさに触れた。家庭訪問を続ける中で、母親から子どもの夜間外出や家事支援などについて相談を受けることがあったという。吉田さんは「保護者を置き去

130人余が参加した「第25回全国教育研究
交流集会 in 埼玉」=7日、さいたま市内



子どもの貧困と向き合おう

埼玉で全国教育研究交流集会 研究者、教師、市民・保護者ら

「すべての子ども・若者に学ぶ喜びと生きる希望を」をテーマに「第25回全国教育研究交流集会 in 埼玉」が7日、さいたま市内で開かれ、132人が参加しました。主催は民主教育研究所と、さいたま教育文化研究所。全体会第一部は「子どもの貧困とどう向き合うか」埼玉からの発信です。生活保護家庭を訪問し、信頼関係を築きながら中学生を対象に高校進学を助けるための週1〜3回の教室を開いてきた「アスポート学習支援」の取り組みを取材し描い

た民放のドキュメント番組を上映しました。さいたま教育文化研究所長の山口和孝さん(埼玉大学名誉教授)は「教育からも福祉からもみえなくなっている、学ぶ喜びと生きる希望から切り離された子どもたちとどう向き合うかが課題となっている」と語りました。同研究所の白鳥勲さん(元高校教師)は、アスポート学習支援事業が中・高校生を対象に県内73カ所に広がっていると紹介。『分かる」と楽しい。もしかしたら明日は、学校に行けるかも』との声が聞ける瞬間があり、それが喜び」

学習支援を受けた女性(20)は「一番学んだのは、人は頼っているんだということだ」と映像で発言。学習支援事業の若い支援員は「学校の枠からこぼれ落ちてしまう子どもたちの思いに寄り添いたい」と語りました。全体会第二部で、朝岡幸彦実行委員長(民主教育研究所運営委員)が、▽学び、表現し、聞くことの意味を問う▽子ども・若者の現実立脚した実践を――などについて基調報告。シンポジウムでは、主権者教育の現場、若い教師の苦悩、そして「9条俳句」をさいたま市内の「公民館だより」に掲載拒否された事件を通して「学び・表現すること」の意味について考えました。

シンポジウムで報告した埼玉県の私立高校・自由の森学園教員の菅間正道さんは「現在の若者たちは安心・安全に生き、自己・他者・世界と出会い、自己・他者・世界を信頼・受容できない人が多いのではないか。どう向き合うか」として、二つの

「あい」が重要だとなりました。一つは、学びあい、支えあい、聴きあい、かわりあい、活(い)かしあい。もう一つは「アイ・私」とし、具体的な授業実践の内容を報告しました。

同集会2日目の8日は、テーマ別の九つの分科会と一つの特別分科会が開かれます。

子の実態ふまえた教育課程を

第2分科会から

民主教育研究所と、さいたま教育文化研究所が主催し、さいたま市内で開かれた「第25回全国教育研究交流集会 in 埼玉」は2日目の8日、テーマ別の分科会で報告と討論を行いました。

第2分科会「学習指導要領改訂と教育課程づくり」では、文部科学省の中央教育審議会が次期学習指導要領改訂への答申をまとめるなか、批判的に分析し、子どもの学習権を保障し人格の完成をめざす実践現場からの教育課程づくりについて討論、交流しました。

民研代表の梅原利夫さん(和光大学教授)が問題提起しました。今回の「答申」は、すべてが「育成すべき資質・能力」に収れんされ、今後の競争教育に積極的に適応していく子ども像を前面に示しているとの分析。2006年教育基本法改定、07年学校教育法改定による「学力の3要素」の法制化が、その源になっていると指摘しました。「教育課程は各学校が子どもや地域の実態を踏まえて作成、実施するもの。教育の自治と自主性を大事にする取り組みをすすめる可能性はある」と語りました。

「ひとりの読み」とは教材文の語や文に反応したことを書き込んだり、書き出したりすること、「話し合い」は書き出したことをみんなの前で話すことで一人ひとりが授業の作り手になること。一人ひとりの想像力、思考力、語彙(ごい)も学習集団のなかで伸ばすことができるといういま報告者は「学校は子どもたち個々が友だちと生活や学習でかわりながら、より人間らしい自分へと、みずからすすんでかわる場でありたい」と思い続けて子どもたちと向き合ってきました」と話しました。



「学習指導要領改訂と教育課程づくり」について議論、交流した第2分科会8日、さいたま市内

学校体育研究同志会の大貫耕一さん(民研教育課程研究委員)は「アクティブ・ラーニング」の視点(主体的・対話的で深い学び)を体育のグループ学習から問う」と題して、小学4年生の跳び箱運動台上前転・はね跳びの実践を報告しました。技の出来具合の違いに着目しながら観察し合い、技の仕組みや動き方のポイント・コツを助言し合い課題解決に迫る大切さを強調。「動きと技のなかにある科学性をわかり、他者とともにできるよつになり、高め合っていくなかで子どもの力は育ってくる。『答申』では『異質な集団で交流する』が明確に位置づいていないのではないかと語りました。

全校アンケート調査を行い、子どもの実態から出発する教育課題づくりの実践報告(埼玉)もありました。